

大江地区試すい調査報告  
 (主要鉱物開発促進調査報告—第2報II)  
 Boring for Ore deposits at the Ōe District, Shiribeshi Province.

長谷川 潔・竹林 勇  
 Kiyoshi HASEGAWA and Isamu TAKEBAYASHI

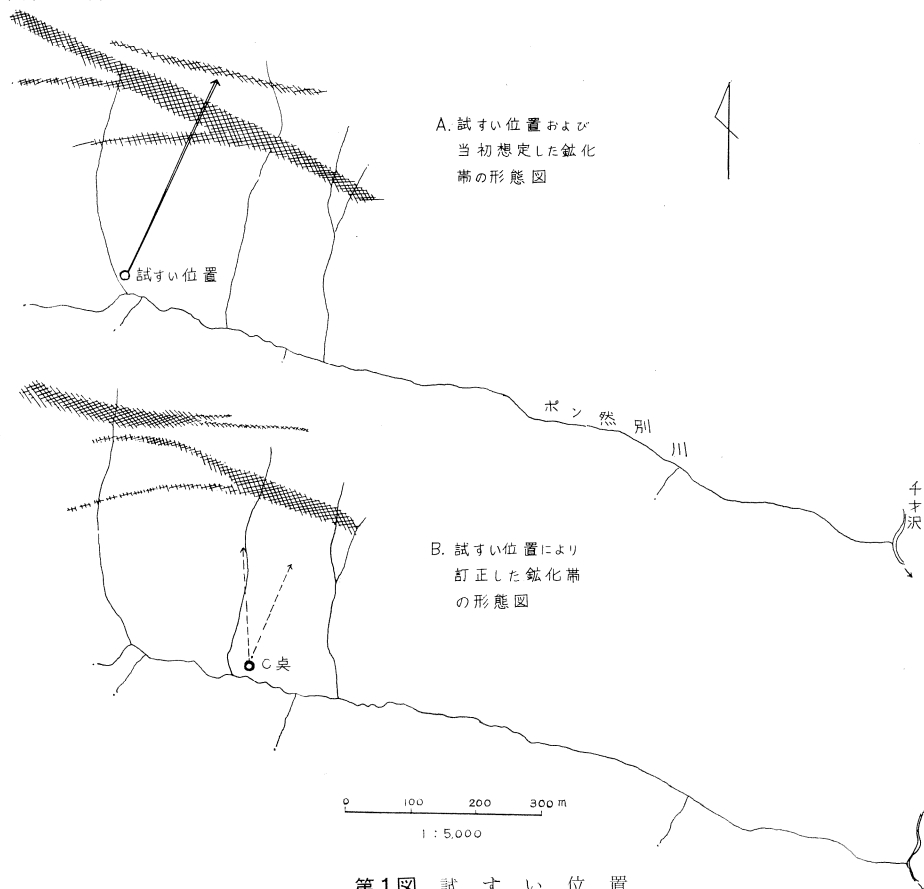
目 次

まえがき	3 試すい結果の考察
1 試すい位置および方位	あとがき
2 試すい結果	

まえがき

昭和41年に地表調査を行なった結果、いくつかの母岩変質帯が新たに確認され、それぞれの変質帯の下部に、新鉱床が存在していると想定された。

昭和42年度は、その中の一つであるスッチ南鉱床をとりあげた。スッチ南鉱床の地表状態は、絹雲母、石英を主とする母岩の変質帯で、わずかに黄鉄鉱—石英脈がみられるだけである。この変質状態と、既開発鉱床の変質状態を比較検討し、この変質



帯は鉍床の上部微候で、下部には銅・鉛・亜鉛を主とする鉍床が存在していると推定した。

この推定にもとづき、鉍床の存在を確認する目的で試すいを行なった。

### I 試すい位置および方位

試すい位置は、ポン然別川が支流千歳沢を分岐する地点から、本流にそってほぼ1,300 m上流の地点である。

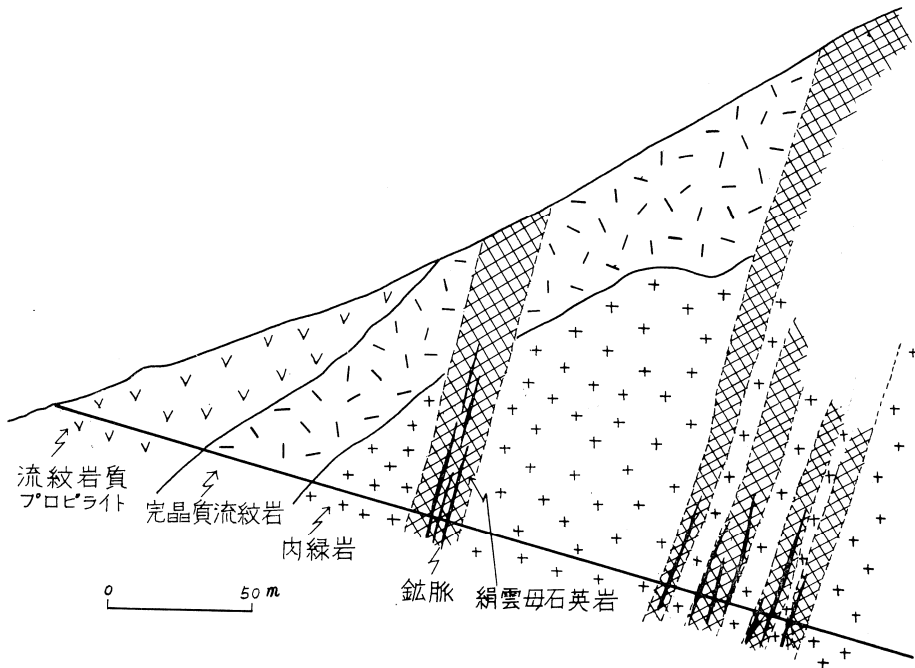
試すい方位は、鉍床の延長方向を  $N 70^{\circ} W$ 、傾斜  $75^{\circ} SW$  と推定し、それにほぼ直角の  $N 24^{\circ} E$ 、 $-15^{\circ}$  とした。試すい延長は 300 m で、試すい実施期間は 5 月上旬から 7 月中旬までの 75 日間である。また、試すい機は、利根 TMF 400 型を使用した。

### II 試すい結果

試すい結果は、第 2 図の柱状図に示したとおりである。図でみられるように、地質は 94 m 以後が閃緑岩であるが、この岩体は地表に露出していない。

鉍化帯は、138 m~141 m と 226 m~275.5 m の 2 ヶ所である。なお、226 m~275.5 m の鉍化帯は、226 m~230 m、239.2 m~246 m、263.5 m~264.3 m および 271 m~275.5 m の 4 つの強鉍化部がみられる。これらの鉍化部には、菱マンガン鉍脈、黄鉄鉍一方鉛鉍一閃亜鉛鉍一石英脈が網状に発達している。各部の品位は第 2 図中に記入してあるとおりである。

試すいコアの採集率は 95 % 以上である。



第 3 図 断 面 図

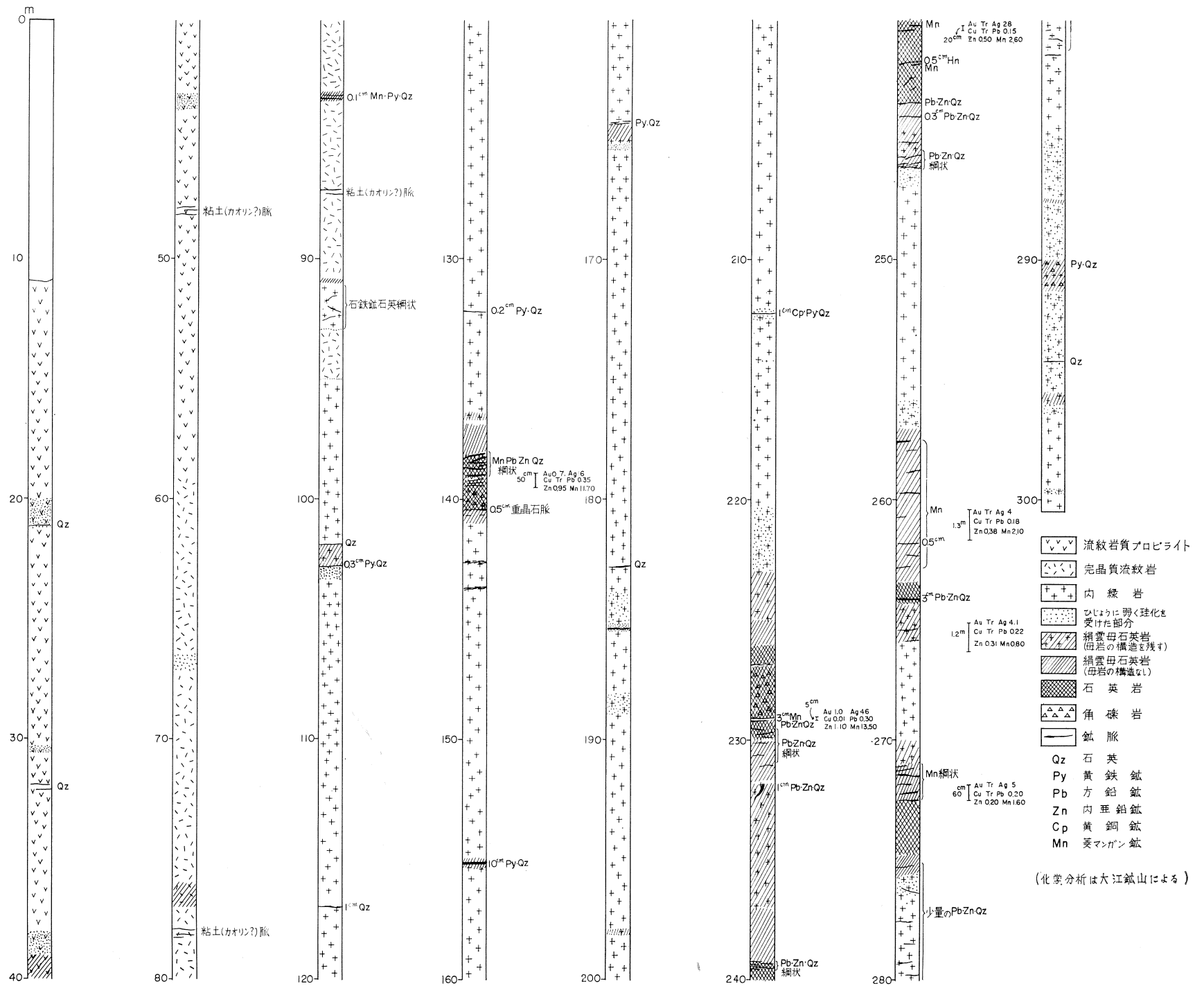
### III 試すい結果の考察

この鉍床の地表状態は、変質岩が発達しているだけであるが、下部には当初に推定したとおり銅・鉛・亜鉛・マンガン鉍床が存在していることが明らかになった。その規模は、鉍脈胚胎範囲の広いことから、小さなものでないと考えられる。

鉍化帯の形態は、当初第 1 図 A に示したような一続きの鉍化帯と考え、試すいを実施したが、試すいの結果、鉍化帯主要部の位置は、当初の想定したと

ころより、かなり深部によっていた。これまで明らかになった各鉍床の例からみても、鉍化帯の傾斜が NE 傾斜とは考えられず、さらに地表の再調査を実施することによって、第 1 図 B の形態をとるものと判断した。

試すい資料を検討した結果、今回の試すいは、雁行配列する単位鉍化帯の境界部にたいして実施したことになる。第 3 図は、この考え方による地表状態と試すい結果の関係を示したものである。



第2図 試すい柱状図

## あ と が き

構造試すいの実施により、のべたような調査結果を得ることができた。ことに、この鉱化帯の下部には銅・鉛・亜鉛・マンガン鉱床が存在していることが明らかになった。この試すいでは稼行可能な鉱体を確認することはできなかったが、試すい位置が鉱床の上部であり、しかも単位鉱化帯の中心部をはずれた位置であることからみれば、より下部または単位鉱化帯の中心部に、稼行可能な鉱体が存在してい

ることは、ほとんど間違いない。

今後、積極的に探鉱を行なう必要があるが、さしあたって第1図B中のC点から、2本ていどの試すいを実施し、鉱体の規模および品位を確認し、方針を決定すべきであろうと考えられる。

この試すい結果は、この鉱床だけでなく、この鉱床の地表状態と同じ地表状態を示す箱崎鉱床でも、下部に銅・鉛・亜鉛・マンガン鉄鉱が存在している可能性をしめすものである。